

安史の乱における唐陣営下のソグド武人 ——「唐・李志忠墓誌」を手がかりに

山下将司

はじめに

七五五年に起こった安史の乱は従来、唐朝の性格を一変させた中国史上の重大な転機として注目されてきた。これに対して近年、安史の乱を中国内の事件に留めず、広く中央ユーラシア諸民との関係から捉え直すとする研究が相次いで発表された¹。中でも森安孝夫は、安史の乱を担った中央ユーラシア出身者に着目し、安史勢力を「征服王朝（中央ユーラシア型国家）」の先駆的存在と位置づける²。

その中央ユーラシア出身者の中で、乱の発生に特に重要な役割を果たしたと考えられるのがソグド人である。首謀者の安祿山・史思明がソグド人の血を引くばかりでなく、安史軍中でソグド武人が大きな比重を占めていたのである。森部豊は、これらソグド武人の多くがかつてモンゴリアに居住して遊牧民化し、突厥第一・第二可汗国の崩壊とともに遺民となって集団で南下した者たちであることを指摘、これを「ソグド系突厥」と呼んだ³。加えて森部は、安祿山の挙兵地幽州がソグド商業網の一

拠点と化していたことを明らかにし、乱の背景には、ソグド人が唐からの独立を目指した側面があったと説く⁴。

一方、安史軍を迎え撃つことになった唐朝は、安史勢力と対照的な状況にあったとされる。榮新江によれば、安祿山に対する嫌悪から「胡化」すなわち西方を主とする外来文化への嗜好に反発が起こり、それがソグド人に対する排斥へと発展、唐朝治下に在ったソグド人は自ら改姓したり出身を隠蔽したりするなど、自己防衛を余儀なくされたという⁵。

森部・榮の両見解より、ソグド系の人々によって主導・牽引される安史軍と、安祿山の挙兵を受け、ソグド人らによる行き過ぎた「胡化」の抑制を図る唐朝という対立の図式が浮かび上がる。しかしながら、この図式に一石を投ずるのが、二〇〇三年に西安市高陽原で出土した「唐・李志忠墓誌」である。誌文によれば墓主の本姓は安であり、ソグド人と見られるが、安史の乱に際して唐軍に身を投じ、安史軍と激闘の末に戦死した。しかも、唐朝は墓主に対し国姓を賜与しているのである。彼の経歴が右の図式に当てはまらないことは一見して明らかである。

本稿では、まず李志忠の従軍の経緯とこれに対する唐朝の処遇を検討し、それを手がかりに安史の乱における唐朝とソグド人との関係について再考したい。

一、「唐・李志忠墓誌」と墓主の経歴

(一) 墓誌釈読

「唐・李志忠墓誌」は『長安高陽原新出土隋唐墓誌』（二〇一六年九月出版）に拓本写真ならびに録文が掲載された。⁷ 同書によれば、本墓誌は、二〇〇三年五月十三日に西安市高新技术產業開發区内、紫薇田園都市の住宅地工事現場で発見された二三九号墓より、誌蓋とともに出土したという。その誌石は青石質で、縦・横ともに四四cm、厚さ八cm、誌文は全二二行、毎行二二文字で全四六四文字、字体は楷書体である。拓本はおおむね良好で、誌石は末尾の二行にかけて破損が見られるが、判読できない文字はない。本墓誌に関しては「賜姓ソグド人」について分析した福島恵による言及があるのみで、専論は公にされていない。⁸

本墓誌には大変多くの故事が引用されているため、原文・訓読の次に故事の注釈を一括して掲げ、その後に語釈・訓読を提示する。

【原文】（数字は行数）

- 1 左金吾衛大將軍隴西李公墓誌并序
- 2 公諱志忠字懷禮本姓安彭原人也。夫意茲決策、齊侯獨
- 3 使乘軒奉春獻謀、漢后偏以賜姓。公所以今為隴西人也。
- 4 曾祖讓祖信父遵、原州都督。皆蓄德蘊仁、尚義敦信。招賢
- 5 不倦、名重於當時、好善無厭、慶流於後嗣、信有之矣。公七
- 6 德稟於家風、六藝由於天性。中鏢破等、未足方奇。列皆貫
- 7 石、與之齊德。爰自弱歲、武略有聞。初命為涼州明威府別
- 8 將。所以驃騎出塞、常在於先鋒、凶奴息師、實畏於飛將。逮
- 9 至狂寇為暴、天下囂然、相國杖戈而先征、繫公用矛而有
- 10 剋。故得二京靜謐、萬里清夷。以元勳茂績、加公雲麾將軍、
- 11 守左金吾衛大將軍。凶慝既誅、黨類未殄、復收餘燼、以保
- 12 鄴城。公乃忿之、奮不顧命、方無存勇而求戰、若狼蹕怒以
- 13 從師。乾元元年十月廿三日、春秋年六十二、斬首計萬、力
- 14 盡而薨。嗚呼、冠軍來弔、用嘉忠節、聖主寵贈、以慰存
- 15 亡。仍輟 朝一日、則古今希也。以乾元二年四月廿
- 16 五日遷窆於高陽原、禮也。嗣子良俊、左驍衛將軍。忠烈克
- 17 彰、令名早著。思彌庸之報怨、念灌夫之復讎。實唯忠孝之
- 18 門、是荷弓裘之業。次子良佐、京兆府崇仁府折衝等。恭承
- 19 教義、哀感路衢。豈荀偃之不瞑、知臧孫之有後。乃為銘曰、
- 20 稱賢勇兮壯軍容、為健將兮當先鋒。能電激兮聲如鍾、破
- 21 勁虜兮摧羣凶。名不隕兮表忠節、石可鏤兮彰盛烈。
- 22 勝光寺沙門貞迅書 京兆府進士張驥撰

【訓読】

左金吾衛大將軍隴西李公墓誌並びに序

公諱は志忠、字は懷礼、本の姓は安、彭原の人なり。夫れ①意茲策を決するや、齊侯独り軒に乘らしめ、②奉春謀を献ずるや、漢后偏り以て姓を賜う。公の今隴西の人爲る所以なり。曾祖讓、祖信、父遵、原州都督たり。皆徳を蓄え仁を蘊え、義を尚び信を敦くす。賢を招きて倦まざれば、名は當時に重く、善を好みて厭くこと無ければ、慶は後嗣に流る、信に之有るなり。

公七徳は家風に稟け、六芸は天性に由る。③鑕に中てて等を破るは、未だ奇を方ぶるに足らず。④皆を列きて石を貫くは、之と徳を齊しくす。爰に弱歳自り、武略に聞こゆる有り。初め命ぜられて涼州明威府別將と爲る。⑤驃騎塞を出づれば、常に先鋒に在り、⑥凶奴師を息むるは、実に飛將を畏るる所以なり。

狂寇暴を爲し、天下囂然たるに至るに逮び、相国戈に杖りて先に征し、緊れ公矛を用て剋する有り。故に二京静謐にして、万里清夷たるを得たり。元勲茂績を以て、公に雲麾將軍・守左金吾衛大將軍を加う。凶慝既に誅さるるも、党類未だ殄きず。復た余燼を収め、以て鄴城を保つ。公乃ち之を忿り、奮いて命を顧みず、⑦無存の勇にして戦うを求むるに方しく、⑧狼蹕の怒りて以て師に従うが若し。乾元元年十月廿三日、春秋年六十二、斬首万を計うるも、力尽きて薨ず。嗚呼、冠軍来りて弔い、用て忠節を嘉し、聖主寵贈し、以て存亡を慰む。仍お朝を輟むること一日、則ち古今希なり。乾元二年四月廿五日を以て窆を高陽原に遷す、礼なり。嗣子良俊、左驍衛將軍たり。忠烈克く彰われ、令名早に著わる。⑨弥庸の報怨を思い、⑩灌夫の復讐を念う。実に唯れ忠孝の門にして、是れ弓裘の業を荷う。次子良左、京兆府崇仁府折衝等たり。恭しく教義

を受け、路衢に哀感す。豈に⑪荀偃の不瞑ならんや、⑫臧孫の後有るを知る。乃ち銘を爲りて曰く、「賢勇を称され軍容を壯にし、健將爲りて先鋒に当たる。電激を能くし声鍾の如く、勁虜を破り群凶を摧く。名は隕ちず忠節を表し、石は鏤るべし盛烈を彰かにせん」と。

勝光寺沙門貞迅書 京兆府進士張驥撰

【故事】

①春秋・齊の邴意茲の故事。前四九七年、齊と衛の連合軍が晋を攻めた際、従軍していた大夫たちはこぞって黄河を渡ることに反対したが、邴意茲だけは晋軍の行軍速度を正確に計算し、危険のないことを進言した。すると齊侯は大夫たちの車を全て取りあげ、邴意茲にだけ車に乗ることを許した（『春秋左氏伝』定公十三年の伝）。

②前漢の婁敬の故事。婁敬は前漢の高祖に仕えた政治家で、匈奴に対して和親策を進言したことで名高い。建国当初、劉邦は洛陽を都とするつもりであったが、婁敬は国都防衛の観点から秦の故地に都を置くよう進言。これによって長安が都となり、婁敬はその功績から劉姓を賜り「奉春君」と呼ばれた（『史記』卷九九、劉敬列伝「二七一七頁」）。③前燕の慕容翰の故事。慕容翰（？—三四四）は前燕の建国者慕容皝の異母兄。慕容翰が一時身を寄せていた宇文部を去り、慕容部への帰還を図ると、宇文部から百騎あまりの追っ手が差し向けられた。かつての同僚を殺すに忍びない慕容翰は、追っ手たちに刀を地面に突き立てさせ、「百歩の距離から刀を射て命中したらお前たちは帰れ。外れたらかかってこい」と約束。一発で刀の柄に命中させたため、追っ手は逃げ帰った（『晋書』卷一〇九、慕容皝載記「二八二七頁」）。

④前漢の李広の故事。李広（？—前一一九）は前漢の文帝・景帝・武帝

の三代に仕えた將軍。ある日、李広が狩りに出かけ、草むらに横たわる石を虎と勘違いして矢を放ったところ、命中して鏃が石に食い込んだ。よく見たら石であつたので、改めて矢を放ってみたが、再び鏃が石に突き刺さることはなかった（『史記』卷一〇九、李將軍列伝「二八七一頁」）。

⑤前漢の霍去病（かくまへい）の故事。霍去病（前一四〇―前一一七）は前漢の將軍で、武帝に仕え対匈奴戦で活躍した。霍去病が匈奴征討のために率いた兵は常に選抜された精兵であり、そのため敢えて匈奴領内に深く侵攻した。霍去病は常にその中の精銳騎兵と共に大軍の先頭に立ったが、天助を得て困窮することはなかったという（『史記』卷一一一、衛將軍驃騎列伝「二九三一頁」）。

⑥前漢の李広の故事。匈奴は李広が右北平の太守となると、彼を「漢の飛將軍」と呼び、右北平への侵入を憚った（『史記』卷一〇九、李將軍列伝「二八七一頁」）。

⑦春秋・齊の敵無存（へいそん）の故事。前五〇一年、齊が晋の夷儀を攻めた際、敵無存は新妻を迎えるのを断つてそれを弟に譲り、真っ先に敵の城壁に登って城門を内側から開けようとしたが、果たせずして戦死した（『春秋左氏伝』定公九年の伝）。

⑧春秋・晋の狼瞫（ろうしん）の故事。前六二七年、狄が晋を攻めた際、晋侯の車右（戦車で御者の右側に乗り戦闘を担当する者）を務めていた狼瞫はその職を解かれた。怒った狼瞫は、二年後に起こった秦との戦いで秦軍に突入し、戦死した（『春秋左氏伝』文公二年の伝）。

⑨春秋・呉の弥庸（びよう）の故事。前四八二年、越王勾践が呉に攻め入った。越軍を偵察していた呉の弥庸は、越の軍中に越の捕虜となった父の軍旗があるのを見つけると、同僚の制止も聞かず越軍と開戦、仇である敵

將を捕らえた（『春秋左氏伝』哀公十三年の伝）。

⑩前漢・灌夫（かんぷ）の故事。灌夫（？―前一一三）は前漢の將軍で景帝・武帝に仕えた。前一五四年に呉楚七国の乱が起こると、灌夫は父の孟と共に討伐軍に従軍し呉軍と戦ったが、孟は戦死。軍規では、父子で従軍し一方が戦死した場合、もう一方が郷里に帰り弔うことになっていたが、灌夫はこれを拒否。わずかな手勢と共に敵陣に突入し、重傷を負うも味方に敵の陣容を知らせた（『史記』卷一〇七、魏其武安侯列伝「二八四五―六頁」）。

⑪春秋・晋の荀偃（けんえん）の故事。荀偃（？―前五五四）は春秋・晋の政治家。前五五五年、齊が魯を攻めると、晋は魯の要請を受け齊に攻め入った。荀偃は晋の中軍を率い、齊の国都・臨淄（りんし）に迫る活躍を見せたが、晋への帰途、病を発し亡くなった。死後も眼を開いたままであつたので、同僚の范宣子（はんせんし）が「子息はあなた同様に主君に尽くします」と慰めたが目を閉じず、「齊との戦いはあなたの死後も必ず引き継ぎます」と言つたところ、ようやく瞑目した（『春秋左氏伝』襄公十九年の伝）。

⑫春秋・魯の臧孫達（そうそんだ）の故事。前七一〇年、魯の桓公（かんと）は宋の君主を殺害した華父督から友好のしるしとして大鼎を贈られると、それを大廟に置いて誇示した。臧孫達は礼に違ふ行為であると桓公を諫めたが聞き入れられなかった。それを聞いた周の内史は、「臧孫達はきつと魯で子孫が続くであろう。礼に背いた君主を徳によって諫めることを忘れなから」と讃えた（『春秋左氏伝』桓公二年の伝）。

【語釈】（数字は原文の行数を示す。）

2 「彭原」 関内道寧州に属する県。

4 「原州都督」 州都督は辺境の要衝あるいは内地の重要地に置かれた特別州。武徳七年（六二四）に総管府を改称した。大中小の等級があり、原州は中都督。

5 「七德」 武がもつ七つの徳目。暴を禁ずる・兵を戢める・大を保つ・功を定める・民を安んずる・衆を和する・財を豊にする（『春秋左氏伝』宣公十二年の伝）。

6 「六芸」 士たる者が学ぶべき六種の技芸。礼・楽・射・御（車馬の操縦）・書・数。

7 「明威府別將」 明威府は府兵制の地方軍府である折衝府の一つ。別將は折衝都尉、果毅都尉に次ぐ折衝府の武官。官品は上府で正七品下、中府で従七品上、下府で従七品下。

10 「雲鷹將軍」 従三品の武散官。

11 「守左金吾衛大將軍」 左金吾衛は十二衛の一つ、大將軍はその長官で正三品。十二衛は管轄下の折衝府より番上する府兵を統率し、皇帝の警護に当たった。「守」とは品階の低い者がより高位の官職を代行すること（当時の墓主の品階は従三品）。

14 「冠軍」 冠軍大將軍。正三品の武散官。ここでは、安慶緒包圍戦において唐軍を率いた九名の節度使（『旧唐書』卷四、肅宗紀、乾元元年九月条「二五三頁」）のいずれかを指すと見られるが、誰が該当するかは不明。

15 「輟朝」 皇帝が親族や高官の死を悼み、朝政を取り止めること。『大唐開元礼』卷三、序例上、雜制「三三頁上段」に、「皇帝本服大功以上親、及外祖父母、皇后父母、百官一品喪、皇帝皆不視事三日。皇帝

本服小功總麻親、百官五品以上喪、皇帝皆不視事一日。」とある。

16 「左驍衛將軍」 左驍衛は十二衛の一つで、將軍はその次官で従三品。18 「崇仁府折衝」 崇仁府は折衝府の一つで、折衝はその長官である折衝都尉。官品は上府で正四品上、中府で従四品下、下府で正五品下。

【和訳】

左金吾衛大將軍隴西李公の墓誌銘ならびに序

公は諱を志忠、字を懷礼といい、本来の姓は安であり、彭原の人である。そもそも邴意茲が計略を決行すると、齊侯は彼にだけ車に乗ることを許し、婁敬が謀を献ずると、漢の高祖は彼にだけ自らの姓を賜った。公がいま帝室と同じ隴西の人となったのも彼らと同じ理由による。曾祖父の讓、祖父の信、父の遵はいずれも原州都督に任じられた。みな徳を蓄え仁を身に付け、義をたつとび信に厚かった。倦むことなく賢人を招聘すれば、時の人に重んじられ、厭くことなく善行を好めば、恩恵が子孫へ及ぶというが、誠にそのとおりである。

公は七德を家風より受けつぎ、六芸を生まれながらにして身に付けていた。慕容翰は地面に突き刺した刀の柄に矢を命中させ、同輩達を追いつたが、それも公の奇才に比べればたいしたことではない。李広がまなじりを決し石を射貫いたことこそ、公がもつ徳に等しいと言える。こうして若くして、秀でた武略が世に轟き、かつて涼州明威府の別將に任じられた。これによって、驃騎將軍霍去病が長城を越えて出撃すると、常に全軍の先頭に立ったように、公も外征で武勇をあらわし、匈奴が「飛將軍」李広の武勇を恐れて休戦したように、公も域外の異民族から恐れられたのであった。

狂った盜賊が暴れ、天下騒乱となるに及んで、相国が戈を杖として出

征されると、公も矛を手にとり賊を討ち破る手柄を挙げた。そのお陰で

長安・洛陽は静謐を取り戻し、万里にわたって平らかに治まった。その大いなる功績をもって、公に雲麾將軍・守左金吾衛大將軍の官を加えた。ところが、凶悪な首魁は誅殺されたが、その一味は依然滅びず、再び殘党を糾合し、鄴城を保持した。公はこの事態に激しく怒り、奮闘して命さえも顧みず、その様は敵無存が勇ましく戦いを求めたことに等しく、狼臙が怒って從軍を望んだかのようにであった。乾元元年（七五八）十月二十三日、享年六十二、万にもおよぶ賊の首を斬りながら、力尽きて亡くなった。ああ、冠軍大將軍は自らやって来て公の死を悼むとともにその忠節を褒め称え、聖主（肅宗）は公をいとおしんで官爵を追贈し、故人と遺族を慰めた。その上で朝政を一日取り止めたのは、古今稀なことである。乾元二年（七五九）四月二十五日に高陽原に改葬したのは、礼に適ったことである。

嗣子の良俊は左驍衛將軍である。厚い忠義心をよく表し、令名は早くから知られていた。弥庸のごとき報怨の念をいただき、灌夫のごとき復讐を誓った。まことに忠孝を尽くす一門に相応しく、父祖伝来の家業を受け継ぐ者である。次子の良佐は、京兆崇仁府の折衝都尉等の官職にある。恭しく教える旨を承け、街中で悲しみを露わにした。公がどうして荀偃のように眼を開いたまま亡くなるであらうか、賊孫達のように長く子孫が続くことがわかっていたのだから。そこで銘を作って次のように言う、「賢と勇とを称され軍の威容を盛んにし、強き將軍となつて先鋒を担った。電撃のごとき速攻を得意として声は鐘のごとく、強敵を破つて悪者どもを挫いた。名声を落とすことがないよう忠節を表し、石に刻んで盛んないさおしを顕彰しよう」と。

（二）墓誌文の構成と墓主の経歴

本墓誌は、誌題（第一行）、誌序（第二―一九行）、銘（第二〇―二二行）、書者ならびに撰者の署名（第二二行）から成る。誌序の内容は①發辭（第三行「公所以今為隴西人也」まで）、②祖父・父について（第五行「信有之矣」まで）、③墓主の人物と生前の事績（第一二―一三行「若狼臙怒以從師」まで）、④墓主の死と埋葬（第一六行「禮也」まで）、⑤子の悲哀（第一九行「知臧孫之有後」まで）に分けられる。誌序は故事を多用して修辭を凝らした文章であり、そのため墓主の生涯に関する具体的な情報は多くない。

墓主は安史の乱の最中の乾元元年（七五八）に六二歳で没しているので、生年は六九七年（万歲通天二年、九月以降神功元年）と逆算される。注目すべきは「本の姓は安」とあることで、福島恵が示したソグド人判定基準に依れば、安姓はソグド人である可能性が極めて高い⁹。また、曾祖父・祖父・父の官がみな原州都督とある点も注目される。この三者が実際に当官に任じられたかは他の史料に確認できないが、原州は北朝時代より唐前半期に至るまでソグド人の一拠点であったことで知られる¹⁰。自らの系譜をソグド人にまつわる地に関連づけるのはソグド人墓誌に見られる特徴の一つであり¹¹、墓主はソグド人と見て間違いないであろう。さて、墓主の経歴として判明するのは次の三点である。

- （一）折衝府の一つ涼州明威府の別將に任じられたこと。時期は安史の乱の発生より前であるが、その経緯については明らかではない。
- （二）安史の乱発生後、唐軍による長安・洛陽奪回戦に従軍し、その功績で雲麾將軍・守左金吾衛大將軍に任じられたこと。誌文の「相国戈に杖りて先に征し」故に二京静謐にして、万里清夷たるを得

たり」とは、至徳二年（七五七）九月から十月にかけて、郭子儀を事実上の指揮官とする唐軍が安史勢力より長安・洛陽を相次いで奪回したことを指す。洛陽は安祿山が挙兵した天宝十四年（七五五）十二月に、長安は翌十五年六月にそれぞれ安史軍の手に落ちていた。したがって、その前の「狂寇暴を為し、天下囂然たるに至る」という句が安史の乱の発生を示す。しかし、墓主が従軍するに至った経緯については明らかではない。なお、郭子儀は乾元元年（七五八）七月に朔方節度使のまま中書令に任じられ、本墓誌が刻された同年四月当時「相国」すなわち宰相の地位に在った。¹²

（三）乾元元年（七五八）九月に発動された安慶緒討伐に従軍し、戦死したこと。誌文の「凶慝既に誅さるるも、党類未だ殄きず。復た余燼を収め、以て鄴城を保つ」とは、唐軍が長安・洛陽を奪回した後、安祿山の子の慶緒が相州に退いて反抗を続けたことを指す。「凶慝」は安祿山を指し、「既に誅さる」とあるが、実際には安祿山は前年の至徳二年（七五七）正月に安慶緒によって殺害され、大燕皇帝の座を奪われていた。唐朝は郭子儀・李光弼をはじめとする九名の節度使を動員して安慶緒に対する討伐を決行、十月中に相州を包囲した。¹³ 墓主はその包囲戦か、相州に至る道中での安慶緒軍との交戦で命を落としたと見られる。

二、李志忠従軍の経緯

前節で見た「李志忠墓誌」の断片的とも見えるわずかな経歴から、墓主が安史の乱で唐軍に従軍した経緯ならびに墓主に対する唐朝の待遇は

如何に考えられるであろうか。李志忠が唐軍に従軍した契機としてまず注目されるのは、次の『旧唐書』卷十、肅宗紀、天宝十五年（七五六）六月条「二四一頁」に見える募兵である。

庚子、至烏氏驛、彭原太守李遵謁見、率兵士奉迎、仍進衣服糧糗。上至彭原、又募得甲士四百、率私馬以助軍。

庚子、（李亨）烏氏驛に至るや、彭原太守李遵謁見し、兵士を率いて奉迎し、仍りて衣服・糧糗を進む。上彭原に至り、又募りて甲士四百を得、私馬を率いて以て軍を助けしむ。

この月、潼関で安祿山軍と対峙していた哥舒翰が敗北すると唐朝は恐慌を来し、玄宗は倉卒に長安を脱出して四川へ逃れた。一方、皇太子李亨（のちの肅宗）は玄宗と別行動を取り、朔方軍を頼って靈武へと向かった。その途上、彭原に立ち寄って兵士を募ったところ、四百名を得たという。

彭原は李志忠の本貫であり、彼がこの時、召募に応じて肅宗に随行したとも考えられる。しかしながら、肅宗に扈從して靈武に赴き、長安奪回後、また肅宗とともに長安へ帰還した者たちに対しては、特に「靈武元從」の称号が与えられ、その子弟は新設された禁軍「神武軍」に組み込まれたという。¹⁴ もし、李志忠が彭原より肅宗に随行したなら、彼も「靈武元從」の資格を有したはずであり、墓誌にも必ずやその榮譽が記されたことであろう。ところが、「李志忠墓誌」にそのことを示す記載は見えないのである。

そこで、次に、李志忠が当時就いていた官職にしたがって唐軍に従軍した可能性を考えたい。その官職とは安史の乱が起こる前に授けられた明威府別將である。周知の如く、府兵制は安史の乱に先立つ天宝八年（七四九）に衛士の上番と派兵の機能が停止され、廃止に至ったとされ

る。¹⁵しかし、実際にはその後も折衝都尉・果毅都尉・別將など、府兵制軍府官を授ける事例が多く見られる。これに関して、『通典』卷一四八、兵一、兵序に次のようにある「三七八〇―八一頁」（カッコ内は原注）。

開元二十年以後、邀功之將、務恢封略、以甘上心。將欲蕩滅奚契丹、剪除蠻吐蕃、喪師者失萬而言一、勝敵者獲一而言萬、寵錫云極、驕矜遂增。哥舒翰統西方二師、安祿山統東北三師、踐更之卒、俱授官名、郡縣之積、聲為祿秩。〔開元初、每歲邊費約用錢二百萬貫、開元末已至一千萬貫、天寶末更加四五百萬矣。按兵部格、破敵戰功各有差等、其授官千纔一二。天寶以後、邊帥怙寵、便請署官、易州遂城府、坊州安臺府別將、果毅之類、每一制則同授千餘人、其餘可知。雖在行間、僅無白身者。關輔及朔方河隴四十餘郡、河北三十餘郡、每郡官倉粟多者百萬石、少不減五十萬石、給充行官祿。暨天寶末、無不罄矣。糜耗天下、若斯之甚。〕於是驍將銳士、善馬精金、空於京師。萃於二統。

開元二十年以後、邀功の將、封略を恢めんと務め、以て上心を甘んぜしめんとす。將に奚・契丹を蕩滅し、蠻・吐蕃を剪除せんと欲し、師を喪えば方を喪うも一と言ひ、敵に勝てば一を獲るも万と言ひ、寵錫云に極まり、驕矜遂に増す。哥舒翰西方の二師を統べ、安祿山東北の三師を統べ、踐更の卒、俱に官名を授けられ、郡県の積、聲く祿秩と為る。〔開元の初め、毎歲辺費約錢二百萬貫を用ひ、開元の末已に一千萬貫に至り、天寶の末更に四、五百萬を加う。兵部格を按ずるに、敵を破るの戰功各々差等有り、其の官を授くるは千に纔かに一、二。天寶以後、邊帥寵を怙み、便ち官を署さんことを請ひ、易州遂城府、坊州安臺府の別將・果毅の類、一制毎に則ち同に授くること千余人、其の余は知るべし。行間に在ると雖も、僅か

も白身の者無し。關輔及び朔方・河隴四十餘郡、河北三十餘郡、郡毎に官倉の粟多きは百萬石、少なきも五十萬石を減ぜず、給して行官の祿に充つ。天寶の末に暨び、聲きざる無し。天下を糜耗すること、斯くの若きの甚しきなり。〕是に於いて驍將・銳士・善馬・精金、京師に空しく、二統に萃まる。

これによれば、天寶年間（七四一―一五六）以後、邊境の節度使とりわけ安祿山と哥舒翰の管下において果毅都尉や別將の官が濫授されたという。節度使による軍府官の授官について、張國剛は次のように説く。總管制（行軍制）が節度使制に成り変わった際、兵馬使や都虞候など、臨戰時における軍職であったものが常設の官職と化した。しかし、それらは使職の形式をとつたため、官位の高下を表示する必要から府兵制軍將の称号を帯びさせた、と。¹⁶つまり、元來は節度使配下の律令制上の地位を示すための寄祿官としての授官であつたのが、やがて節度使が配下將士の欲心を買うための手段と化し、濫授に至つたのである。軍府は俸祿の供給源を示すに過ぎず、軍府官を授けられた者と軍府との間にもはや統屬關係は存在しなかつた。

さて、李志忠が明威府の別將に任ぜられた経緯は墓誌に記されないが、その件に引用される前漢の霍去病と李広の故事（⑤⑥）より、何らかの異民族征討にまつわる授官であつたことが暗示される。そこから連想されるのは、天寶年間の末に哥舒翰によつて起こされた吐蕃征討である。『旧唐書』卷一二二、曲環伝「三五〇一頁」には次のようにある。

曲環、陝州安邑人也。…天寶中、從哥舒翰攻拔石堡城、收黃河九曲、洪濟等城、累授果毅別將。

曲環、陝州安邑の人なり。…天寶中、哥舒翰に従いて攻めて石堡城を拔き、黃河の九曲、洪濟等の城を収め、累ねて果毅・別將を授け

らる。

天宝十二年（七五三）、隴右・河西兩節度使となった哥舒翰は、吐蕃の勢力下にあった黄河上流の九曲の地に攻め入り、複数の城を陥落させた。¹⁷ 曲環はこの戦いに隴右節度使の麾下として従軍し、別將さらには果毅都尉が授けられたという。節度使による征討に従軍した褒賞として軍府別將が授けられているのである。

隴右・河西二つの節度使を兼ねるに至った哥舒翰は、東方の安祿山同様、テュルク系遊牧民やソグド人らを積極的に麾下に取り込み、「蕃漢」を統合した軍の結成を目指したことで知られる。¹⁸ また、林偉洲と陳璋は、哥舒翰が潼関の戦いで安祿山軍に敗れ囚われの身となった後、哥舒翰軍の残存部隊や留守部隊の將領たちが次々と靈武へ集結し、即位間もない肅宗を護衛する任に当たったと指摘する。長安・洛陽奪回戦においても、郭子儀の率いる朔方軍だけでなく、王思礼や王難得ら旧河西・隴右軍の將帥もまた一軍を率いて加わっていたのである。¹⁹

以上の点を踏まえると、李志忠について次のような従軍経緯が推測可能である。

哥舒翰麾下として吐蕃討伐に従軍、褒賞として軍府別將を授かる。

↓ 安史の乱で哥舒翰敗北後、靈武の肅宗の下に馳せ参じる。↓ 長安・洛陽奪回戦に従軍。

次に、李志忠が長安・洛陽奪回戦に従軍した褒賞として、守左金吾衛大將軍を授けられたことの意味について検討しよう。左右金吾衛は十二衛の一つで、元来、自己管下の折衝府より上番してくる衛士を率い、宮城・京城の巡回警備や行幸の際の「先駆後殿」等を主な任務とした。²⁰ しかし、先述したように、衛士上番はすでに天宝八年（七四九）に停止され、加えて安祿山軍の長安占拠による混乱もあり、李志忠が左金吾衛大

將軍の職掌をもって統率しうる兵士は存在しなかったと見られる。『唐大詔令集』卷一〇一、政事・官制下「置上將軍及增諸衛祿秩詔」〔五一四頁〕には次のようにある。

左右金吾及十六衛等將軍、故事皆擇勳賢、出鎮方隅、入居侍衛。其左右金吾等衛、自天寶艱難以後、雖衛兵廢闕而品秩本高。此誠文武勳臣出入遷轉之地、宜增祿秩以示優崇。

左右金吾及び十六衛等の將軍、故事皆勳賢を択び、出でては方隅に鎮し、入りては侍衛に居る。其れ左右金吾等の衛、天寶の艱難自り以後、衛兵廢闕すと雖も品秩本より高し。此れ誠に文武勳臣の出入遷轉の地なれば、宜しく秩祿を増して以て優崇を示すべし。

安史の乱以後、左右金吾衛を含む十六衛の將軍職がいずれも配下兵士を欠き、武散官と化していったことが記される。²¹ そればかりか、安史の乱においては十二衛の大將軍職までもが唐朝によって濫授されたと見られるのである。『資治通鑑』卷二一九、至徳二年（七五七）四月条〔七〇二三—二四頁〕に次のようにある（カッコ内は胡三省の注）。

是時府庫無蓄積、朝廷專以官爵賞功、諸將出征、皆給空名告身、自開府、特進、列卿、大將軍、下至中郎、郎將、聽臨事注名。其後又聽以信牒授人官爵、有至異姓王者（信牒者、未有告身、先給牒以爲信也）。諸軍但以職任相統攝、不復計官爵高下。及清渠之敗、復以官爵收散卒。由是官爵輕而貨重、大將軍告身一通、纔易一醉。凡應募入軍者、一切衣金紫、至有朝士僮僕衣金紫稱大官、而執賤役者。名器之濫、至是而極焉。

是の時府庫に蓄積無く、朝廷専ら官爵を以て功を賞し、諸將出征すれば、皆空名告身を給い、開府・特進・列卿・大將軍自り、下は中郎・郎將に至るまで、事に臨んで名を注するを聴す。其の後又信牒

を以て人に官爵を授くるを聴し、異姓王に至る者有り〔信牒は、未だ告身有らずして、先に牒を給いて以て信と為すなり〕。諸軍但だ職任を以て相い統攝し、復た官爵の高下を計らず。清渠の敗（※至徳二年四月、郭子儀が長安西方の清渠で禄山軍と戦い敗れたこと）に及んで、復た官爵を以て散卒を収む。是に由りて官爵軽くして貨重く、大將軍の告身一通、纔か一醉に易うるのみ。凡そ募に応じて軍に入りし者、一切金紫を衣、朝士の僮僕の金紫を衣て大官を称するも、賤役を執る者有るに至る。名器の濫、是に至りて極まれり。

將士への褒賞に用いる貨財の不足に苦しんだ唐朝は、官爵をもつてそれを補つたため、あらゆる官爵が濫授される事態となり、授官対象は兵士や奴僕にまで及んだという。その濫授された官爵に各種の大將軍までもが含まれていたのである。実際、李志忠とはほぼ同じ時期に彼同様に雲魔將軍・守左金吾衛大將軍を授けられた事例が存在する。「唐・権秀墓誌」に次のようにある。²²

君姓權氏、諱秀。族本天水、代居真寧、今爲真寧人。祖父咸有令德焉。天生偶才、鬱爲時興、克抱忠義、致命邦國。君始從鉤陳環衛之軍、超羽林射聲之倫。當肅宗中興之年、君有元扈之勳。國有殊命、爵亦超特。起家拜雲魔將軍、守左金吾衛大將軍、上柱國、左羽林軍上下。

君、姓は權氏、諱は秀。族は天水を本とし、代々真寧に居れば、今真寧の人爲り。祖・父咸令德有り。天俊才を生み、鬱りて時興と爲り、克く忠義を抱え、命を邦國に致す。君、始め鉤陳環衛の軍に従い、羽林射聲の倫を超ゆ。肅宗中興の年に当たり、君に元扈の勳有り。國に殊命有り、爵も亦超特す。起家して雲魔將軍・守左金吾衛大將軍、上柱國、左羽林軍上下に拜せらる。

この権秀は祖父・父ともに官歴が記されず、本人も安史の乱が発生するまで無位無官であった。それが靈武に逃れた肅宗の下に馳せ散じた功により、いきなり雲魔將軍・守左金吾衛大將軍に起家したという。これが実体を伴わない授官であった証拠に、権秀の実際の職務は羽林軍としての宿衛であった。李志忠は安史の乱前に軍府別將を帯びており、また長安・洛陽奪回戦にも従軍しているので権秀とは一線を画するが、彼が二都奪回後に授けられた雲魔將軍と守左金吾衛大將軍までもが、当時濫授されていたことは明らかである。

以上に見たように、李志忠は安史の乱で唐軍に従軍したとはいえ、その官歴は官職濫授の実情を示すのみで何ら注目すべき点がない。これは誌石の規模にも反映されている。石見清裕によれば、墓誌石の規模は玄宗期になると、おおむね一辺が一尺半（約四五cm）、二尺（約六〇cm）、二尺半（約七五cm）という三等級に分けられたという。²³ 本墓誌は一辺四四cmであり、ほぼ一辺一尺半に当たる。誌文一行目の誌題に「左金吾衛大將軍」とあるように、李志忠は死後、「守」のつかない左金吾衛大將軍を追贈され、正三品に至ったと見られる。ところが、用意された墓誌石の規模は最低の等級だったのである。

しかし、看過できないのは、唐朝がそのような人物に対してまで国姓を賜与したことである。彼の経歴を見渡せば、その契機となった出来事は安史の乱における従軍以外には考えられない。また、唐代における国姓賜与の事例を一覧した福島分析に基づけば、経緯が判明する事例においては全て対象者の生前に行われており、李志忠の場合も戦死に対する追贈などではないと見られる。²⁴ 唐朝による李志忠への賜姓は一体どのような意味を持つのであろうか。

三、唐陣営下のソグド武人

従来、安史の乱におけるソグド人への国姓賜与として注目されてきたのが、李抱玉の事例である。李抱玉は本の姓名を安重璋といい、北朝から唐前半期にかけて中国在住ソグド人として最も有力な家系であった「武威安氏」に属する。彼は安史軍との戦いに功績を挙げて節度使に任じられ、安史の乱平定後には同中書門下平章事を兼ね宰相の地位にまで至った。『旧唐書』卷一三二、李抱玉伝「三六四六頁」に次のようにある。

抱玉上言、「臣貫屬涼州、本姓安氏。以祿山構禍、恥與同姓、去至德二年五月、蒙恩賜姓李氏。今請割貫屬京兆府長安縣。」許之、因是舉宗並賜國姓。

抱玉上言すらく、「臣、貫は涼州に属し、本姓は安氏たり。祿山禍を構え、与に姓を同じくするを恥づるを以て、去る至德二年五月、恩を蒙りて姓李氏を賜る。今、貫を割き京兆府長安縣に属さんことを請う」と。之を許し、是に因りて宗を挙げて並びに国姓を賜う。

これは代宗即位（七六二）の後、李抱玉が本貫を武威から長安へ移すことを願ひ出た記事である。その上奏によれば、李抱玉は乱勃発後一年半が経過した至德二年（七五七）五月に安祿山と同姓であることを恥じ、唐朝より特別に国姓を賜与されたという。また、この上奏を受けた唐朝は、李抱玉の宗族に対しても国姓を賜与した。この記事に注目した榮新江は、安史の乱勃発後、朝野に湧き起こった安祿山に対する嫌悪の情が、赫赫たる名声を持つ武威安氏に改姓を促すに至り、他のソグド人もこれを模倣したと説いた。²⁵

これに対して筆者は、李抱玉が安史の乱勃発以後、国姓賜与に至るまで一貫して南陽で安祿山軍の南進を食い止めていた事実を突き止め、李

抱玉への賜姓は、その軍功に対する褒賞であつたと見るべきことを指摘した。²⁶

はたして、李抱玉や李志忠への国姓賜与はソグド人に対する嫌悪や排斥の現れであつたのだろうか。あらためて安史の乱におけるソグド人への国姓賜与の背景を探るため、唐陣営下のソグド人に対する処遇を確認することにしよう。以下にその事例を挙げる。

①李国臣。朔方軍の軍将として安史軍との戦いに従軍した。『新唐書』卷六一、李光弼伝「四五九二頁」に次のようにある。

李国臣、河西人、本姓安。力能扶關、以折衝從收魚海五城、遷中郎將。後爲朔方將、積勞擢雲麾大將軍、賜姓李。從光弼守河陽、累封臨川郡王。

李国臣、河西の人、本の姓は安。力能く関を扶^めき、折衝を以て魚海五城を収むるに従い、中郎將に遷さる。後朔方將と為り、労を積みて雲麾大將軍に擢かれ、姓李を賜る。光弼の河陽を守るに従い、累ねて臨川郡王に封ぜらる。

李国臣は本の姓がソグド人の可能性が高い安であり、またその出身である河西は武威・張掖・酒泉・敦煌等、各地にソグド人聚落が存在していた。これらの点が福島恵によって示されたソグド人判定基準（以下、福島基準と略称）を満たし、ソグド人と判断できる。²⁷

李国臣が賜姓された経緯は審らかではないが、「魚海五城を収む」とあるのが注目される。福島²⁸の指摘によれば、魚海とは涼州武威の南、青海の北に位置する唐と吐蕃との抗争地である。『文苑英華』卷九二七所載豆盧誼撰「宗義仲神道碑」「四八八二頁」に、「遂從安思順破魚海敗五城、授上柱國。又從哥舒翰破吐蕃收九曲（遂に安思順に従い魚海を破りて五城を敗り、上柱國を授けらる。又た哥舒翰に従い吐蕃を破りて九曲

を収む。」と見え、この安思順による吐蕃征討に従ったことを指すと見られる。その年代は明らかではないが、安思順は天宝十一年（七五二）に河西節度使から朔方節度使に遷っているので、それよりも前のことである。李国臣が朔方将に遷ったのも安思順に従っての異動であろう。安思順は安史の乱が起ると朔方節度使を解かれており（七五五²⁰）、この間に李国臣が同じ安姓の上司である安思順を差し置いて国姓を賜与されたとも考えがたいので、彼への賜姓の時期はそれよりも後、安史の乱中と見るのが妥当である。「光弼の河陽を守るに従い」とは、乾元二年（七五九）に唐軍の李光弼と史思明との間で争われた河陽城の攻防を指す。なお、「国臣」という名も唐より賜与された嘉名と見られるが、賜名の時期は不明である。

②何遊仙。徳宗の時代に鄜坊丹延等州節度使となった何文哲の墓誌に父として見える。同墓誌に次のようにある。³¹

葱嶺岨秀於西陲、歸邪耀芒於北極。…公諱文哲、字子洪、世爲靈武人焉。…公、本何國王丕之五代孫。前祖以永徽初款塞來質、附於王庭。簪纓因盛於本朝、爵賞由光於中土。…列考遊仙、皇寶應元從功臣、開府儀同三司、行靈州大都督府長史、上柱國、贈尚書右僕射。祿山僭盜、肅宗幸邊。毒志方肆於狼心、義勇共殲於梟師。

葱嶺は西陲に岨秀し、歸邪は北極に耀茫す。…公諱は文哲、字は子洪、世々靈武の人爲り。…公、本何國王丕の五代孫なり。前祖、永徽の初めを以て塞に款して質に來、王庭に附す。簪纓因りて本朝に盛んにして、爵賞由りて中土に光る…列考遊仙、皇の宝應元從功臣、開府儀同三司・行靈州大都督府長史・上柱國、贈尚書右僕射たり。祿山僭盜するや、肅宗邇に幸す。毒志は方に狼心を肆にし、義勇は共に梟師を殲ぼさんとす。

何姓はソグド姓の一つであり、誌文はその系譜を何國王すなわちソグディアナの都市クシャニーヤの王の末裔と称する。また、冒頭で葱嶺Ⅱパミールというソグディアナと関係の深い地名が示される。以上の諸点が福島基準を満たし、この一族はソグド人と判断できる。

何遊仙は朔方節度使が置かれた靈武を本貫とし、また行靈州大都督府長史という朔方節度使に關係する官にも任じられているので、元來朔方軍に属していたと見られる。一方、「宝應元從功臣」とは代宗の即位に貢獻した禁軍兵士を指す。肅宗崩御の直前、張皇后が実子でない皇太子李豫の廢立を図り、宦官程元振が禁兵の射生軍を率いてこれを阻止した。李豫即位の後、射生軍にはその褒賞として「宝應功臣」の称号が与えられたという。このことから、中田美絵は何遊仙が射生軍の統率者である射生使であった可能性が高いと指摘する。³²つまり、何遊仙は肅宗の時より禁軍に属していたのであり、恐らくは肅宗が靈武に居た際に朔方軍から編入されたのであろう。森部は何遊仙が「ソグド系突厥」である可能性を指摘する。³³

③曹懷直（曹元秀）。『大唐西市博物館藏墓誌』に収載される「唐・曹懷直墓誌」によって存在が知られた。³⁴同墓誌に次のようにある。

府君諱懷直、字元秀、其先疎勒國王裴氏之族也。後徙燉煌、因為郡人焉。曾祖諱軍、皇初以左威衛中郎將翊扶有功、賜姓曹氏。祖諱鎮、左金吾將軍。父諱法智、唐元功臣、左龍武大將軍、封酒泉郡公、贈開府、武威太守。…君開府之長子也。…屬隴右醜虜未殄、節度使哥舒公深佇才略、尤資武毅。奏起復充討擊副使。…未幾功立、遷左清道率、賜紫金魚袋、依前充使。天寶十五年、凶逆亂華、今上幸靈武、追入宿衛、拜右龍武將軍知軍事。本諱元秀、改為懷直、實署行也。至德初、扈從歸中京、紀叙勳効、授雲麾將軍。又以統領有能、遷本

軍大將軍、上柱國。

府君諱は懷直、字は元秀、其の先疏勒国王裴氏の族なり。後燉煌に徙り、因りて郡の人と爲る。曾祖諱は車、皇初左威衛中郎將を以て翊扶に功有り、姓曹氏を賜る。祖諱は鎮、左金吾將軍たり。父諱は法智、唐元功臣にして、左龍武大將軍たり、酒泉郡公に封ぜられ、開府・武威太守を贈らる。…君、開府の長子なり。…属々隴右の醜虜未だ殄きず、節度使哥舒公深く才略を付え、尤も武毅を資む。奏して起復せしめ討撃副使に充つ。…未だ幾ばくならずして功立ち、左清道率に遷り、紫金魚袋を賜り、前に依りて使に充てらる。天宝十五年、凶逆華を乱すや、今上靈武に幸し、追つて宿衛に入らしめ、右龍武將軍知軍事に拜す。本の諱は元秀、改められて懷直と爲す、實に署して行わるるなり。至徳の初め、扈從して中京に歸るや、勲効を紀叙し、雲麾將軍を授けらる。又統領に能有るを以て、本軍大將軍・上柱國に遷さる。

誌文中に曹懷直がソグド人であるとの明記はないが、曹姓はカブーダンの出身者が称したとされ、ソグド姓の一つであること、また、疏勒（カシュガル）という西域の地に系譜を求めていること、ソグド聚落が存在した敦煌の出身であること、以上の三点から福島基準に従えば、曹懷直はソグド人である可能性が高いと判断される。

曹懷直の父は「唐元功臣」すなわち玄宗による韋后一派の誅殺（七一〇）に貢献した功臣の一員であり、その功臣集団から編成された禁軍である龍武軍の大將軍に任じられた。曹懷直自身は哥舒翰に登用されて隴右節度使麾下の討撃副使となり、吐蕃征討に従軍した。安史の乱では哥舒翰の敗北後、肅宗が逃れた靈武に赴き、龍武將軍に任じられて龍武軍を統率、長安奪回後には父も就いた龍武大將軍に昇進した。注目すべき

は、靈武に馳せ散じた功により肅宗から嘉名を賜与され、名を懷直と改めたことである。

④李国珍（安暉）。西安市より出土した墓誌によつて存在が知られた。その墓誌に次のようにある。³⁶

公将門令族、本姓安氏、諱暉、字暉、武威郡人也。天寶中、以忠勇見進、武藝知名。莅職有恪勤之勞、理行為時輩所範。及燕虜犯闕、二聖蒙塵、公奉肅宗、以爪牙從事。由是得罄其肝膽、稍沐洪恩、特賜嘉名、改氏皇姓。出生入死、實為士卒之先、執銳被堅、頗歷日月之久。其改諱曰國珍、則有以見寵渥器重之義矣。肅宗昇遐、大皇帝、初奸臣嬖女、構禍宸衷。公於危急之時、共定其難、故有寶應功臣之號。

公は将門の令族、本の姓は安氏、諱は暉、字は暉、武威郡の人なり。天寶中、忠勇を以て進められ、武芸もて名を知らる。職に莅みては恪勤の勞有り、行いを理めては時輩の範とする所と爲る。燕虜闕を犯し、二聖蒙塵するに及んで、公肅宗を奉じ、爪牙を以て従事す。是に由りて其の肝胆を罄くし、稍く洪恩に沐するを得、特に嘉名を賜り、氏を皇姓に改めらる。出生入死すること、実に士卒の先と爲り、鋭を執り堅を被ること、頗る日月の久しきを歴たり。其の諱を改めて国珍と曰うは、則ち以て寵渥器重の義を見わさんとする有り。肅宗昇遐し、大皇帝に即くや、初め奸臣嬖女、禍を宸衷に構う。

公危急の時に、共に其の難を定め、故に宝応功臣の号有り。李国珍は本の姓が安であり、また、本貫が河西地方最大のソグド聚落が存在した武威であることが福島基準を満たし、ソグド人と判断される。すでに中田が注目したように、李国珍は射生使であるとともに何遜仙と同じく「宝応功臣」の称号を帯びており、肅宗の時より禁軍に属して

いた。³⁷「肅宗を奉じ爪牙を以て従事す」とはこのことを指す。黄樓は射生軍が精銳部隊として外征をも任務とし、安史軍との戦いにも従事したと指摘しており、李国珍への賜姓・賜名はそのような外征での功績に対する褒賞と見られる。

また、李国珍の本貫の武威は河西節度使の治所であり、哥舒翰の麾下の多くが哥舒翰敗北後に靈武へ赴き肅宗の護衛を担ったという林偉洲と陳瑋の指摘に拠るなら、李国珍は元は河西軍に属する武人であった可能性がある。

ところで、最近福島は、李抱玉・李国臣・李国珍の三人が至徳二年（七五七）正月に武威で起こったソグド人の反乱において「胡人勢」を率いて唐に帰順し、その功績によって賜姓を受けたとの見解を示した。⁴⁰しかし、私見によれば、李抱玉は天宝十五年（七五六）正月から至徳二年五月までの間、南陽で安祿山軍と戦っていたと見られ、武威の反乱に関わることは不可能であったと思われる。⁴¹また、李国臣・李国珍についても、その出身が河西・武威であるという以外に反乱に関与したとする根拠が示されておらず、福島の見解は首肯しかねる。

⑤李元琮（史元琮）。新旧『唐書』に立伝されないが、玄宗・肅宗期の宦官であり、密教僧不空の俗弟子となつてその布教を支えた事で知られる。安史の乱後、龍武軍の將軍に任じられた。中田は李元琮の本の姓がソグド姓の一つの史であること、安史の乱勃発前の天宝十三年（七五四）にソグド人と関係の深い涼州にいたこと、不空がソグド人であることと見られること等から、李元琮を涼州出身のソグド人武將と見なした。⁴²ところが、近年、王連龍によつて李元琮の墓誌が公にされ、そこに次のようにある。⁴³

公諱元琮、陰山之貴族也。以功高命氏、列籍帝枝、今為隴西人也。

曾祖不仕。父景暉、贈絳州刺史。母何氏、贈鄆國夫人。十五年、扈從巴蜀、除折衝、授郎將、賜紫金魚袋。及肅宗皇帝龍飛北朔、鳳翔西土、入京洛之天宮、求河嶽之良佐。知公茂德、命公對見。一言道合、千年會遇。君臣契義、魚水適心。改左內率府率、都巡宮苑使。旋授龍武將軍知軍事、秩加定遠將軍。

公諱は元琮、陰山の貴族なり。功高きを以て氏を命ぜられ、籍を帝枝に列ね、今隴右の人為るなり。曾祖仕えず。父景暉、贈絳州刺史たり。母何氏、贈鄆國夫人たり。十五年、巴蜀に扈從し、折衝に除され、郎將を授けられ、紫金魚袋を賜る。肅宗皇帝北朔に龍飛し、西土に鳳翔するに及んで、京洛の天宮に入り、河嶽の良佐を求む。公の茂徳たるを知り、公に命じて對見せしむ。一言にして道合い、千年會遇す。君臣義に契い、魚水心に適う。左內率府率、都巡宮苑使に改めらる。旋いで龍武將軍知軍事を授けられ、秩定遠將軍を加えらる。

「陰山の貴族なり」とあるように、当墓誌では北方の出身としており、王連龍は李元琮を唐に帰属した突厥人と斷ずる。⁴⁴確かに、突厥阿史那氏の出身者が隋や唐に帰属したのち史姓を稱した例が史書に見られ、また近年、姓が史であることからソグド人と判斷されていた人物が、墓誌の発見により突厥阿史那氏の出身者であることが判明した事例もある。⁴⁶ただ、この李元琮の場合、阿史那氏出身との明記はなく、森部の説くソグド系突厥である可能性も否定できない。そこで本稿では出自の判斷は保留し、突厥人ないしソグド系の人物が安史の乱の最中に禁軍將軍に任じられた例として扱う。中田によれば、李元琮が賜姓された時期は乾元三年（七六〇）閏四月一四日以降、永泰元年（七六五）六月一八日以前の⁴⁷間であり、安史の乱での事績に係る可能性がある。

以上の事例に見られるように、安史の乱中に国姓や嘉名を賜与されたソグド人が複数存在する。そこで気づくのは、李志忠の名も「忠を志す」という嘉名に類することである。

唐代では「忠」字を含む嘉名の賜与が多く見られ、例を挙げれば、朱全忠（『旧唐書』巻一九「七二六頁」）、王忠嗣（同巻一〇三「三一九七頁」）、楊国忠（同巻一〇六「三三四三頁」）、阿史那忠（同巻一〇九「三二九〇頁」）、張孝忠（同巻一四一「三八五五頁」）、李忠臣（同巻一四五「三九四一頁」）、朱忠亮（同巻一五一「四〇五六頁」）、李思忠（同巻一九五「五二二四頁」）などがある。他にも契丹の李尽忠（同巻六「二二五頁」）や沙陀の沙陀尽忠（『新唐書』巻二一八「六一五四頁」）の如く、唐に帰順した非漢人に「忠」字を含む名を称する例が見られ、これらも同じく唐からの賜名と考えられる。以上から類推すれば、李志忠の名も唐朝からの賜名であり、その時期はやはり国姓賜与と同じく安史の乱中と見るのが妥当である。

賜姓・賜名以外にもう一つ注目すべき点は、ソグド人が禁軍の将領に任じられた事例がこれも複数認められることである。何遜仙と李国珍に至っては、肅宗・代宗交替時に発生した帝位を巡る宮内政変にまで関与し、功績を挙げた。それだけ唐朝の中樞に近い位置にソグド人達が仕えていたのである。これはもはや排斥などではなく、むしろ優遇・重用と言うべきであろう。李抱玉も節度使に任じられる前にいったん右羽林軍大將軍に任じられている。⁴⁸ いま、上記のソグド人に対する賜姓・賜名ならびに禁軍將領への任官の状況を一覽にすると次の如くである（ゴチックは元安姓の人物）。

・ 李国臣……	賜姓	賜名	禁軍
・ 何遜仙……			禁軍
・ 曹懷直……		賜名	禁軍
・ 李国珍……	賜姓	賜名	禁軍
・ 李抱玉……	賜姓	賜名	禁軍
・ 李志忠……	賜姓	賜名	
・ 李元琮……	賜姓		禁軍

一見すれば分かるように、元安姓のソグド人に対しては全て国姓・嘉名が賜与されている。李抱玉への賜名は安史の乱より前とされ、また、李国臣への賜名の時期は明らかではない。しかし、李志忠のような官歴に顕著な点がない人物までもが安史の乱で賜名されたとすると、李国臣への賜名も安史の乱の際でなければ、それ以前に既になされていたと見るべきである。つまり、李志忠の事例を通じて、安史の乱で唐朝を奉じて軍功を挙げた安姓のソグド人に対しては、賜姓・賜名が徹底されたと推測されるのである。単に安姓の抹殺が目的であるのなら、嘉名の賜与まで徹底する必要はあるまい。唐朝の意図としては次の二点を指摘する。

第一に、安史陣営を意識した対外的宣伝である。「はじめに」で述べたように、安史勢力には多くのソグド武人が含まれていた。彼らに対し、唐陣営に属せば、たとえ安祿山と姓を同じくするソグド人といえども、国姓・嘉名が与えられる程に優遇される、と訴えるねらいがあったと考えられる。実際、李抱玉が賜姓された後の至徳二年（七五七）十一月、安史軍でソグド系突厥を率いたと見られる康阿義屈達干が唐に帰順している。⁵⁰

第二に、自陣営のソグド人に対する慰撫、つまり離反の防止である。

河西・隴右節度使であつた哥舒翰が、安史の乱前に積極的にソグド人を麾下に取り込んでいたことはすでに指摘がある⁵¹。また、榮新江と森部は、安史の乱の後に靈武から河北へソグド武人移住の波があつたと説く⁵²。靈武は朔方節度使の治所であるから、それらのソグド集団は安史の乱の際には朔方軍に属していたと考えられる。一例として、九世紀前半に河朔三鎮の一つ、魏博の節度使となつた何進滔の一族を挙げる。『旧唐書』卷一八一、何進滔伝「四六八七頁」に次のようにある。

何進滔、靈武人也。曾祖孝物、祖俊、並本州軍校。父默、夏州衙前兵馬使、檢校太子賓客、試太常卿。以進滔之貴、贈左散騎常侍。進滔客寄於魏、委質軍門、事節度使田弘正。

何進滔、靈武の人なり。曾祖孝物、祖俊、並びに本州軍校たり。父默、夏州衙前兵馬使・檢校太子賓客・試太常卿たり。進滔の貴を以て左散騎常侍を贈らる。進滔魏に客寄し、質を軍門に委ね、節度使田弘正に事う。

何姓はソグド姓の一つではあるが、右の『旧唐書』列伝に何進滔がソグド人であることの明証は見えない。ところが、何進滔の子で同じく魏博節度使となつた何弘敬の墓誌が発見され、そこにソグド人と見なしうる手がかりが記されていた。すなわち、何進滔の妻は康氏、何弘敬の妻は安氏であり、父子でソグド人の可能性が高いソグド姓の女性を娶っていた。さらに、その系譜で隋に仕えたソグド人何妥を祖先としていたのである⁵³。これらの点が福島基準を満たし、何進滔の一族はソグド人と判断される。森部はこの一族をソグド系突厥と見なす⁵⁴。

さて、何進滔は靈武を本貫とし、曾祖の孝物と祖の俊が靈州軍校という朔方軍管下の將校に任じられたとある。そうであれば、この一族は安史の乱では朔方軍の武人として唐軍に従軍したことであろう。このよう

に、安史勢力のみならず、唐陣営にも多くのソグド武人が内包されていたと考えられるのである。

安史の乱時、唐朝において安祿山に対する嫌悪があつたのは当然であるう。しかし、自陣営のソグド人に対して唐朝は厚遇とも言える処遇をしており、彼らに対する排斥の風潮を認めることはできない。「李志忠墓誌」とはそのことを如実に語る史料なのである。

むすび

安史勢力は多くの非漢人指導者に統率された遊牧部落を軍勢力として有していたが、それは安史軍を迎え撃つた唐軍も同じであつた。突騎施出身の哥舒翰が統率した河西・隴右軍においても、漢人節度使郭子儀が率いた朔方軍においても、テュルクを主とする遊牧集団が軍の枢要を占めていた⁵⁵。そして本稿で見たように、安史勢力だけでなく唐陣営にも多くのソグド武人が内包されていたと考えられる。『通典』編者の杜祐が安祿山と哥舒翰を指して「二統」と称したように、八世紀半ばの農牧接壤帯に位置した節度使は共通する軍事構造から成つていたのである。

安史勢力が中央ユーラシア情勢を背景に形成され、その出身者を基盤として新たな政治権力に発展しつつあつたとする近年の指摘はきわめて重要である。しかしながら、軍の編成から見れば、安史の乱とは、系統を等しくする者同士の戦いでもあつた。実際、朔方軍は乱の終結後に鉄勒出身の僕固懷恩に率いられて唐に叛旗を翻し、また哥舒翰についても安祿山とは別に唐からの自立を図つていたとする指摘がある⁵⁶。農牧接壤帯の節度使は一つ情勢が変われば別の「安史勢力」と化す可能性を有していたのである。つまり、程度の差こそあれ、中央ユーラシア的特質は

唐の北辺節度使に浸透していたのであり、そのような軍による防衛体制を現出させたところに唐代の特色があると言える。

文献目録

【史料版本】

- ・『史記』『晋書』『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『唐六典』『通典』『唐大詔令集』 中華書局標点本。
- ・『文苑英華』 中華書局影印本。
- ・『大唐開元礼』 汲古書院、一九七二年。

【和文文献】

- 石見清裕 二〇〇七 「唐代墓誌史料の概観——前半期の官撰墓誌・規格・行状との関係——」『唐代史研究』十、三—二六頁。
- 石見清裕 二〇一六 『ソグド人墓誌研究』 汲古書院。
- 齊藤茂雄 二〇一五 「突厥有力者と李世民——唐太宗期の突厥羈縻支配について——」『関西大学東西学術研究所紀要』四八、七七—九九頁。
- 中田美絵 二〇〇七 「不空の長安仏教界台頭とソグド人」『東洋学報』八九—三、三三—六五頁。
- 中田美絵 二〇〇九 「五臺山文殊信仰と王權——唐朝代宗期における金閣寺修築の分析を通じて——」『東方学』一一七、四〇—五八頁。
- 林 美希 二〇一一 「唐・左右龍武軍の盛衰——唐元功臣とその後の禁軍——」『史滴』三三、一一—一三八頁。

濱口重國

一九三〇 「府兵制度より新兵制へ」『史学雑誌』四一—一・一二、一—四一・五九—一二七頁。『秦漢隋唐史の研究』上巻、東京大学出版会、一九六六年、三—八三に再録。

福島 恵

二〇〇五 「唐代ソグド姓墓誌の基礎的考察」『学習院史学』四三、一三五—一六二頁。『東部ユーラシアのソグド人』汲古書院、二〇一七年、一一—六二頁に改題改訂再録。

福島 恵

二〇一八 a 「唐後半期における賜姓ソグド人——涼州武威安氏と賜姓——」『東洋史研究』七六—四、一〇—一四〇頁。

福島 恵

二〇一八 b 「バクトリア人羅姓墓誌の基礎的考察」『内陸アジア史研究』三三、一一—二五頁。

森部 豊

一九九七 「唐魏博節度使何弘敬墓誌銘」試釈「吉田寅先生古稀記念アジア史論集」吉田寅先生古稀記念論文編集委員会、一二五—一四七頁。

森部 豊

二〇〇二 「唐代河北地域におけるソグド系住民——開元寺三門樓石柱題名及び房山石經題記を中心に——」『史境』四五、二〇—三七頁。森部二〇一〇、二七—五八頁に改題加筆再録。

森部 豊

二〇〇八 「ソグド系突厥の東遷と河朔三鎮の動静——特に魏博を中心として——」『関西大学東西学術研究所紀要』四一、一三七—一八八頁。森部二〇一〇、一二三—一八一頁に改題加筆再録。

森部 豊

二〇一〇 「ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的发展」『関西大学出版部』

森部 豊

二〇一一 「増補・7—8世紀の北アジア世界と安史の乱」森安孝夫編『ソグドからウイグルへ——シルクロード東部の民

族と文化の交流―』汲古書院、一七五―二〇五頁。

森部 豊

二〇一二 「『安史の乱』三論」、森部豊・橋寺知子編『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部、一―三四頁。

森部 豊

二〇一三 『安祿山「安史の乱」を起こしたソグド人』山川出版社。

森安孝夫

二〇〇二 「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』一七、一一七―一七〇頁。『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会、二〇一五年、二―四八頁に加筆再録。

森安孝夫

二〇〇七 『シルクロードと唐帝国』講談社。

山下将司

二〇一一 「唐のテュルク人蕃兵」『歴史学研究』八八一、一―一頁。

山下将司

二〇一八 「安史の乱におけるソグド人李抱玉の事績について」『史艸』五九、二八―五六頁。

【中文文献】

陳 璋

二〇一六 「新出《唐曹懷直墓誌》所見安史之乱前後粟特武人動向研究」『中華文史論叢』二〇一六―三（上海）、三二一―三四五頁。

福島 恵

二〇一六 「絲綢之路青海道上的粟特人―從看「康令憚墓誌」鄯州西平康氏一族―」榮新江・羅豐主編『粟特人在中国―考古發現与出土文献的新印証』科学出版社（北京）、一一六―一三一頁。『東部ユーラシアのソグド人』一九〇―二二二頁に日本語版再録。

谷 霽 光 一九六二 『府兵制度考釈』上海人民出版社（上海）。

黄 楼

二〇一四 「唐代射生軍考」『史林』二〇一四―一（上海）、六一―六七頁。

林偉洲

二〇〇九 『安史之乱与肅代二朝新政權結構的展開』花木蘭文化出版社（台灣・永和）。

榮新江

二〇〇三 「安史之乱後粟特胡人的動向」、紀宗安・湯開建主編『暨南史學』二（廣州）、一〇二―一二三頁。榮新江『中古中国与粟特文明』生活・讀書・新知三聯書店（北京）二〇一四年、七九―一二三頁に再録。

王連龍

二〇一四 「李元琮墓誌及相關問題考論」『吉林師範大學學報（人文社會科學版）』二〇一四―六（吉林）、三五―三八頁。『新見隋唐墓誌集釈』遼海出版社（瀋陽）、二〇一七年、一八六―一九五頁に再録。拓本写真付き。

張国剛

一九八九 「唐代藩鎮軍將職級考略」『學術月刊』一九八九―五（上海）、七一―七六・八一頁。『唐代政治制度研究論集』文津出版社（台北）、一九九四年、一五七―一七四頁に再録。

- 1 **【注】** 安史の乱に対する見方の推移については森部二〇一一、一七五—七七頁参照。
- 2 森安二〇〇二および二〇〇七、三〇五—一〇頁。
- 3 森部二〇一一。
- 4 森部二〇〇二。
- 5 森部二〇一三、七四—八五頁。
- 6 榮二〇〇三。
- 7 李明・劉杲運・李舉綱主編、文物出版社（北京）、二〇六—〇七頁。
- 8 福島二〇一八a、一三三頁、注（一〇）。
- 9 福島二〇〇五、一四八—四九頁。
- 10 石見二〇一六、第Ⅱ部「固原の史氏一族墓誌」。
- 11 福島二〇〇五、一四六頁。
- 12 『旧唐書』卷二〇、郭子儀伝「三四五二頁」。
- 13 『旧唐書』卷十、肅宗紀、乾元元年九月条「二五三頁」。
- 14 林二〇一一、一二二—一二三頁。
- 15 濱口一九三〇—一二二、一〇七頁。谷一九六二、一二三—一二三頁。
- 16 張一九八九、七二頁。
- 17 『資治通鑑』卷二六、天寶十二年五月条「六九一八頁」。
- 18 中田二〇〇七。山下二〇一一、七一八頁。福島二〇一六、一一九—一二六頁。
- 19 林二〇〇九、七一—七四、八四—八六頁。陳二〇一六、三三六—三四〇頁。ただし、林が、肅宗朝において羽林軍が哥舒翰配下の郭英乂と李抱玉によって相次いで掌握されたと説く（八六頁）のには賛同できない。
- 20 山下二〇一八、四三—四七頁参照。
- 21 『唐六典』卷二五、諸衛府、金吾衛条「六三八頁」ならびに『通典』卷二八、職官十、左右金吾衛条「七八八—八九頁」。
- 22 濱口一九三〇—一二二、一〇九—一一〇頁。
- 23 貞元七（七九二）年刻。氣賀澤保規編『新編唐代墓誌所在総合目録』（明治大学東アジア石刻文物研究所、二〇一七年。以下、『氣賀澤目録』と略称）七八—九番。石見二〇〇七、一〇—一三頁。
- 24 福島二〇一八a、一〇三—〇八頁。
- 25 榮二〇〇三、一〇四—〇五頁。
- 26 山下二〇一八、三八—四三頁。
- 27 福島二〇〇五。以下、「福島基準」は全て同じ。
- 28 福島二〇一八a、一一五頁および一三四頁注（一五）。
- 29 『資治通鑑』卷二六、天寶十一年四月条「六九二二頁」、同書卷二二七、天寶十四年十一月条「六九三七頁」。
- 30 『旧唐書』卷一〇、李光弼伝「三三〇七—〇九頁」。
- 31 大和四年（八三〇）刻。『氣賀澤目録』九四四四番。
- 32 中田二〇〇七、五一頁。
- 33 森部二〇〇八、一五四頁、注（二七）。
- 34 乾元二年（七五九）刻。胡戟・榮新江主編『大唐西市博物館藏墓誌』北京大學出版社（北京）、二〇一二年、五九八—九九頁。『氣賀澤目録』六九六三番。また、專論として陳璋二〇一六がある。
- 35 「唐元功臣」については林二〇一一参照。
- 36 興元元年（七八四）刻。『氣賀澤目録』七六三五番。
- 37 中田二〇〇七、五一頁。
- 38 黃二〇一四、六三頁。
- 39 注（一九）に同じ。
- 40 福島二〇一八a、一一四—一六頁。
- 41 山下二〇一八、三八—四三頁。
- 42 中田二〇〇七、四〇—四二頁。
- 43 王二〇一四。大曆十一年（七七六）刻。『氣賀澤目録』七四〇六番。
- 44 王二〇一四、三六頁。
- 45 『旧唐書』卷一九四下、突厥伝下「五一八〇頁」に見える特勤大奈がその一例。
- 46 『資治通鑑』卷一九三、貞觀四年四月条「六〇七九頁」に見える史善応のこと。齊藤二〇一五、八五頁参照。
- 47 中田二〇〇七、四〇—四二頁。
- 48 『旧唐書』卷一三三、李抱玉伝「三六四五頁」、『新唐書』卷一三八、李抱玉伝「四六一九頁」。なお、『旧唐書』卷十、肅宗紀は「右羽林將軍」とする「二五七頁」。

- 49 『新唐書』卷一三八、李抱玉伝「四六一九頁」。ただし、『旧唐書』李抱玉
伝に賜名のこととは見えない。山下二〇一八、二九―三五頁参照。
- 50 森部二〇一一、一八九―一九三頁。
- 51 中田二〇〇七。福島二〇一六、一一九―二六頁。なお、中田は哥舒翰配
下のソグド人武将として他にも羅伏磨と辛雲京という人物を挙げるが、
羅姓は漢人・鮮卑人の他はトハリストン出身のバクトリア人が称した姓
であるとの指摘があり（福島二〇一八b）、また辛雲京はソグド人と認定
できる要素に乏しく、本稿では除外した。
- 52 栄二〇〇三、一一一―一六頁。森部二〇〇八。
- 53 森部一九九七、一三九頁および二〇〇八、一六六―六八頁。栄二〇〇三、
一一二頁。何弘敬墓誌は咸通六年（八六五）刻。『氣賀澤目録』一〇九八
二番。
- 54 森部二〇〇八。一六六―六八頁。
- 55 森部二〇一二、一一―二五頁。山下二〇一一、四―八頁。
- 56 中田二〇〇九、五〇―五一頁および五八頁注（二六）。